

令和4年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる  
「プロジェクト型」の共同研究 研究報告書

令和6年3月7現在

研究課題名	国際河川を巡る「対立」と「協力」：ドナウ（ダニ्यूブ）川を中心に				
申請者 （代表者）	氏名		所属機関・職		
	山田 哲也		南山大学・教授		
研究構成員		氏名	所属機関・職	専門分野	役割分担
	1	星野 昌裕	南山大学・教授	中国研究	国際河川を巡る 国際政治学的研究
	2	大八木 英夫	同・准教授	自然地理学	国際河川の水 質保全に関する 国際協力を 巡る研究
	3	籠橋 一輝	同・准教授	環境経済学	国際河川の環 境保全に関する 経済学的研究
	4	地田 徹朗	名古屋外国語大学・ 准教授	旧ソ連圏研究	ロシア・中東 欧国際関係に おける国際河 川研究
	5	秋山 信将	一橋大学・教授	国際政治学 安全保障・国際 制度論	国際河川管理 制度と安全保 障／グローバル・ガバナ ンス
6	都留 康子	上智大学・教授	国際政治学	国際河川と海 洋ガバナンス の比較研究	

### 研究成果の概要

令和4年5月14日（土、於：南山大学名古屋キャンパス）および11月4日（金、於：北海道大学）に研究会を開催し、令和5年3月4日（土、於：北海道大学）に総括のセミナーを実施した。

これらの機会での議論を通じ、ヨーロッパ、中央アジア、東南アジア、中東・アフリカの河川を取り上げて比較・検討したところ、上流国と下流国の力関係が「対立」と「協調」の決定的要因であることが明らかとなった。また環境経済学における統合型資源管理モデルは、国際河川の

状況分析にあたって国際政治学・国際関係論からのアプローチにも応用できることが明らかとなった。さらに、水文学・水資源管理学の知見は、国際河川の効率的利用や環境保全を巡る政策決定過程の分析においても重要な役割を果たし得ると考えられる。

令和4年度の研究活動を通して、今後も学際的な検討を続けることを研究代表者および研究構成員で確認したところである。なお、本研究はユーラシアの河川紛争をめぐる重要課題をテーマとしており、センターが組織する生存戦略研究の推進に寄与するものである。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

山田哲也「国際河川委員会の経験とグローバル・ガバナンス」日本国際政治学会 2022 年度研究大会国際政治経済分科会報告（2022 年 10 月 29 日、於：仙台国際センター）

山田哲也「国際河川制度の起源と展開：グローバル・ガバナンス論への含意」『アカデミア』社会科学篇第 25 号（2023 年 6 月）

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）

日本国際政治学会 2023 年度研究大会の部会企画（「国際河川を巡る協調と対立」）に応募し採択され、2023 年 11 月 10 日に山田、地田が報告し、司会に星野、コメンテーターとして岩下が登壇した。

また令和 6 年度科学研究費補助金基盤研究（A）「国際河川を巡る『協調』と『対立』：規範の形成・実施と紛争構造に関する学際的研究」（代表者：地田徹朗）に応募し、採択された。

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。